



学校だより

【教育目標】 学ぶ心 思う心 挑む心

令和7年度 第11号

神林中学校(☎66-5313) 令和8年3月24日

第7回卒業証書授与式を挙行政いたしました。

3月6日 神林中学校第7回卒業証書授与式を行いました。

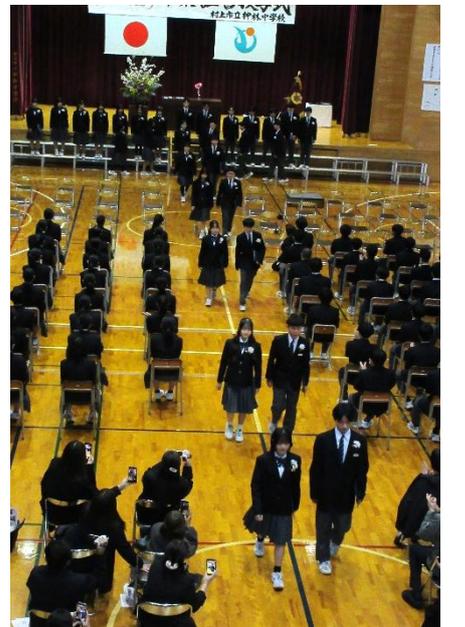
前日まで冷たい天気で心配しましたが、当日は朝から卒業生の門出を祝うように暖かい日差しが差し込んでいました。たくさんの来賓の皆様、保護者の皆様にお越しいただき、卒業生の門出を見届けていただきました。

卒業証書授与では、しっかりとした返事と動きで、新しい旅立ちへの決意と覚悟を示してくれました。授与に向かう生徒は引き締まった表情でしたが、しっかりと目を見て、少し微笑んで受け取る生徒もたくさんいました。

卒業生代表の答辞では、3年間を振り返り、色々な人への感謝を伝えていました。卒業生だけでなく、保護者の方、来賓の方の中にも感動の涙を流す姿がありました。

卒業記念合唱は、「3月9日」を歌いました。男子の太く力強い声と女子のきれいなハーモニーが素晴らしい合唱となり、会場の全員を感動させました。

卒業生にとって新しい出発の節目でしたが、どの学年の生徒にとっても、次のステージへ踏み出すスタートとなる清々しい卒業式でした。最後に、体育館前から生徒玄関までの廊下に1、2年生が並んで3年生を見送りました。拍手の中、卒業生は堂々と胸を張り、別れのあいさつをして学校を後にしていました。





式 辞

9年間の義務教育を終え、それぞれの未来へ踏み出す皆さんに、この旅立ちの日にあたり、お願いしたいことが二つあります。

ひとつは、「小さな努力を大切にする。」ということです。

山を登るとき、山頂をめざして歩いていても、なかなか山頂は近づいてくれません。焦って走っても疲れるだけです。そんなとき、視線を少し先の道に向け、黙々と一歩ずつ前に進みます。しばらく歩いた後、休憩すると、山頂が少し近く見えます。それを何度か繰り返すうちに、いつの間にか山頂に到着することができます。

では、山頂が雲で隠れて見えない時はどうでしょう。雲の上にある山頂が分からなくても、目の前の道を一歩ずつ前に進みます。自分のペースで黙々と歩き、適度な休憩を入れて、また前に進む。ゴールが見えなくても、今できることを地道にやることで確実に山頂へ近づきます。

人生は、山を登るのに似ています。人生の目標やゴールは見えることも見えないこともあります。高校入試のようにはっきりとした目標があることもあれば、今の努力が何につながっているか分からなかったり、自分の進む道が分からなくなったりすることもあります。そんな時、魔法はありません。一気に山頂に連れて行ってくれる近道もありません。今、目の前に見える道を誠実に進むだけです。前に進むとその先に道が見えます。自分ができることを地道に続けていると、誰かが「こっちへおいで」と手招きしてくれることもあります。応援してくれたり助けてくれたりすることもあります。でも、それは、自分でしっかりと前へ歩いている人だけです。

校長 横山 雅史



「目の前のできることに誠実に向き合い、小さな努力を続ける。」皆さんにはそんな人生の歩き方をしてほしいと思います。

二つ目は、「自分を大切にする。」ということです。

入学式でも話をしましたが、皆さんは、「まだ何者でもありません。」みなさんは、人生の入り口に立っているだけです。これから、高校へ行っても将来がすべて決まるわけではありません。「自分はこれをやりたい。」「これを人生の一番中心に置く。」と決めるのは、早くても、あと十年近く後ではないでしょうか。みなさんが出会った人々、見てきた世界、触れてきた文化や学問は、まだ世界のごく一部です。これから出会う人、出会う学びの中に、皆さんの一生を決める「鍵」が隠されています。

もし、「どうせやってもダメだ。」と、自分をあきらめてしまえば、自分の中に隠れている可能性を引き出すことはできません。自分の人生を決める、幸せにつながる「鍵」を見つけることもできません。

中学校まで自分の思うように進んできた人も、思うように行かなかった人も、自分の中に眠る可能性を信じてください。これから出会う人や自分が体験することに、誠実に、焦らず、あわてず、あきらめず、向かっていってください。それが、「自分をあきらめない」「自分を大切にする」ということです。

しっかりと前を向き、自分を信じて努力をする人は、必ず誰かが見えています。声をかけてくれる人、助けてくれる人が必ずいます。これから進む、新しい世界、新しい仲間の中で、自分を大切に、自分を信じて、前に進むことをやめないでください。

「飛び立て、羽ばたけ、神中 卒業生」みなさん一人一人の幸せと活躍を、心から心からお祈りします。

送 辞

在校生代表 岸 宗吾

私が、三年生の姿で特に印象に残っていることは物事に全力で取り組む姿です。行事の中ではもちろん、日々の生活の中でも常に元気で私達在校生にその元気を与えてくれました。

体育祭では、練習から三年生がすすんで前に出て一二年生にも指導してくれ、当日では赤軍・青軍ともに学年の垣根を超え手を組み合っている姿が見られました。また応援団員以外の三年生も積極的に競技中の応援に参加する姿、自分達の競技に全力で取り組む姿、準備や片付けに素早く取り組む姿、励ましの声をかけている三年生の姿を見て、自分のためだけでなくみんなのために動ける三年生はとても光り輝いて見えました。体育祭スローガンの「輝心和勝 ～輝く心で勝ちに行け～」という言葉通りの体育祭を作り上げてくださったのは三年生の働きによるものだと感じました。

合唱コンクールは名前を合唱発表会と変え、例年とは異なる形での実施となり不安を感じた生徒もいたと思います。しかし三年生はその影響を全く感じさせない力強い歌声を響かせ、体育館全体を包みこみました。合唱中には、三年生の実力を肌で感じ圧倒されました。賞が授与される時には自分の学年以外でも大きな拍手を送り、親しい友人に賞が渡される時には席を立ってともに喜び称え合う姿が見られ、三年生の友達に対する優しさを感じました。

今年は校内で感染症が流行した影響で球技大会がなくなり、悲しみの声が聞こえました。しかし、有り余ったエネルギーを委員会で発揮し、三年生が一二年生を統率し、リーダーとしてまとめ上げていきました。その活躍で今の神林中学校は、より明るくより活発になったと感じています。あいさつ運動や下越地区激励会でも堂々とした姿を見せてくださり、最上級生としての貫禄を見て私達もこうなりたいと思いました。まだまだ未熟な私達在校生ですが、1年後には今の三年生を超える最高のリーダーや、神林中学校の名前に恥じない生徒になれるよう何事も真剣に全力で頑張ります。

これから先輩方は、それぞれの道に進みます。時には理不尽なことや大きな困難に直面することもあるでしょう。ですが、そんな時こそ神林中学校で仲間とともに過ごした輝かしい三年間を思い出し、自分だけの未来へと迷わず突き進んでください。在校生一同心から応援しています。



答 辞

卒業生代表 小野 緑日

当たり前のように過ぎていった景色が、今、この瞬間、かけがえのない宝物へと姿を変えようとしています。本日、私たち62名は、希望と寂しさを胸に、卒業の日を迎えました。

3年前の春、私たちは、まだ少し大きな制服に身を包み、期待と不安を抱きながら、温かな拍手に導かれて、この体育館に足を踏み入れました。

振り返れば、駆け抜けるような3年間でした。がむしゃらに追いかけていた先輩方の背中には、いつしか私たちが受け継ぐべき道標となり、気付けば後輩たちを導く立場になっていました。共に笑い、時に悩みながら過ごした日々の中で、私たちは「誰かと力を合わせ、一つのことを成し遂げる。」という、何物にも代えがたい喜びを学びました。

中学校生活最後の体育祭。最初はただ「勝利」だけを追い求めていた私たちでしたが、練習を重ね、泥にまみれて汗を流す中で、いつしか勝敗を超えた絆が芽生えていきました。互いを鼓舞し全力で駆け抜けたあの時間は、学年を一つの「家族」のように結びつけてくれました。

また、合唱発表会では、重なり合う歌声が体育館に響き渡りました。心を一つに歌い上げた、その経験は、どんな賞状よりも輝かしく、結果以上に価値のあるものを、みんなで見つけ取ることができました。

在校生のみなさん。今日は私たちの門出のために、心のこもった素晴らしい式を準備してくれて本当にありがとう。委員会や部活動、そして学校行事。どんな時も一生懸命で、真っ直ぐに私たちを追いかけてくれたみなさんの存在は、私たちの大きな支えでした。共に汗を流し笑い合った時間は、私にとってかけがえのない思い出です。壁にぶつかり、立ち止まりそうになった時、ひたむきに努力する、みなさんの姿に、先輩である私たちの方が何度も背中を押され、勇気もらいました。春からは、みなさんが、この神林中学校の伝統のたすきを受け継ぐ主役です。これから先、迷いや不安に直面することもあるかもしれませんが。そんな時は、隣にいる仲間を信じて、皆さんらしい彩りで新しい歴史を刻んでいってください。私たちが大好きだった、この学校の未来を、皆さんに託します。ずっと応援しています。

先生方、未熟な私たちを今までねばり強く支え、導いてくださり、ありがとうございました。日々の授業はもちろんのこと、廊下ですれ違う際にかけてくださった何気ない一言が、どれほど私たちの心を軽くしてくれたかわかりません。また、毎日愛情たっぷりの給食を届けてくださった調理員のみなさん。その温かな美味しさは、私たちの午後の力の源であり、何よりの楽しみでした。厳しくも温かい眼差しに見守られ、この学び舎で過ごせた時間は、私たちの人生の宝物です。いただいた教を糧に、私たちは新しい一歩を踏み出します。

そして、大好きなお父さん、お母さん。誰よりも近くで、誰よりも強く、誰よりも私の味方でいてくれてありがとう。困難に立ち向かう強さだけでなく、「時には立ち止まってもいいんだよ。」と退く勇気を教えてくれたのも家族でした。家族のために一生懸命働くその背中には、私にとって一番の憧れであり誇りです。心配や迷惑ばかりかけてしまったけれど、そのたびに差し伸べてくれた温かい手に、何度も救われました。これからも見守っててください。いつか、私たちが受け取った以上の恩返しができるよう胸を張れる大人になって見せます。

最後に、私の愉快的な仲間たち。3年生のみなさん。この学年は、いつだって「楽しむこと」に全力で、エゴがあふれる最高の居場所でした。みんなで笑い転げた体育の授業。静電気の衝撃に驚き合った実験。たわいもない会話で息ができなくなるほど笑った昼休み。特別なことは何もないはずの日常が、みんなといたから最高の特別な時間になりました。ぶつかり合い、本音で言い合ったあの日々さえも、今は愛おしい記憶です。残り62日から始まった卒業カウントダウンカレンダー。今日、その数字はついに0日となりました。明日からは、それぞれが選んだ別々の道を歩いていきます。けれど、共に過ごしたこの3年間が、私たちの心を繋ぎ、未来を照らす光となると信じています。瞳を閉じれば、いつだってあの日が鮮やかによみがえります。同じ空の下、どこかで繋がっている仲間を思い、自分の未来を力強く切り拓いていきましょう。みんなに出会えて、本当に幸せでした。3年間ありがとう。



義務教育 最後の給食 感謝のメッセージ交換



3月5日、卒業式の前日、3年生は義務教育最後の給食をいただきました。最後の給食のメニューはカツカレーとサラダ、デザートも付いていました。

その最後の給食の食缶のフタに調理員のみなさんが卒業を祝うメッセージを書いてくださいました。

このメッセージに対して、生徒たちもお礼のメッセージを書きました。食缶のフタを通じた心のこもったメッセージの交換は、神林中の「思う心」の現れであると感じました。

